熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	暗森 ： 和歌 ： 文苑
Author(s)	高田，天山
Citation	龍南會雜誌，１１４： ４４-４５
Issue date	1905-11-23
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5887
Right	

Kumamoto University

Dまぎれたる思を野べにかへすべき小鳥もあらで風にゆく秋

暗　森

高田天山

秋雨の海をたゝけど音はなうて胸にぞひゞけうれひの緒琴（馬關海峽にて）

瀬戸こゑてさびしときゝし雨の音かへりこむ日の興なりきてもたどり入る森のくらきに何なげく、朝ともならばゑむ花あらむ

われとわが森に辿りてさびしきにさびしと泣かむ君も歌人（以上三首夕闇兄より）

運命なり求め入りにしとこやみの森に光のありとし思ふや

跡もなうわが名は黒くぬられたり野には咲けく春風秋風（二首かへし）

さと百里禪寺の門の秋風やみちし思の胸ひやしみる

＊　＊　＊　＊　＊

君やわれや空ゆつちゆの思遠く夕野相みて戀うつゞしむ

そら遠くしたふ光の今ぞ沈むのべに祈りの聲ひゞかせむ、

歌たびしよべのみ姿求め入るにこよひゆかしき眠のひろぬ、

その夜共に名けし星よ名は忘れずみはかべよぶに光流れよ

植もみしみなみの椰子の若緑若きそよぎの南風に故國戀ふ、

三日三夜のあらしはないで雲美し夕野靜に世は秋に入る

うたによしや秋靜寂の水白うたでの花ちる川ぞひのやど、
夕風に落葉乱るゝ二荒山秋を甚五がのみの香さむき
森くれて村々くれて秋風やなほくれのこる聲なし野川
今はたゞさまよひ野みちすぎし日の戀をゆかしみ辿り入る宵
煉獄にこよひかれてゆく魂の空に聲あるよのあらしかな、
夏姫のみぐるましたふ青嵐筑後を吹ひて今肥後に入る、
きぎみ終へし佛たまよぶ秋の夜やかめのひあふぎ散りて聲なき、

漢詩

清音帖序

足立靖

崎陽自古爲文墨之地、德川氏之世、群才輩出、殆爲雲蒸霞蔚之觀、鉄翁、逸雲、梧門、措而不問、師南蘋長花鳥者、有鎬本梅溪、研鑽宋元之画風、別出一機軸者、有竹浦甫雪、出于狩野、入于楊門、傳雪舟之衣鉢、闢所謂雲谷一派者、有雲谷等顔、筆力超脱、兒視群才、使出能村竹田有董北苑後眞画師之眼者、有釧路雲泉、賞稱一氏之名匠、可謂盛矣、其他如沈南蘋、如後方園、下帷于此地、